

ケイト・リチャード・オヘアと社会主義フェミニズム Kate Richards O'Hare and Socialist Feminism

栗原 涼子

In this paper, I will discuss Kate Richards O'Hare's ideas of labor, feminism and socialism. O'Hare thought that class issues and labor problems were more important than feminist issues. According to her, women's problems might be solved when socialism was realized. She had a traditional notion of women's proper place being the home, however, she joined the woman suffrage movement and supported the birth control movement. O'Hare's strong will can be seen in her anti-nationalism and work in the peace movement. While in prison, she continued to work for peace, freedom of speech and prison reform. Even though she insisted that she was not a feminist, her strong-mindedness and political commitment did vanish. She was one of the outstanding socialist activists and important women reformers in the progressive era.

革新主義時代の社会主義運動とフェミニズム、グリニッジヴィレッジにおけるフェミニズム、さらにアナキストフェミニズムについては別稿で論じた。

ここでは労働者の権利と社会主義思想とくに注目し、反戦を主張したケイト・リチャード・オヘアのフェミニズムへの共感と限界について考察する。

1 社会主義と労働問題

ケイト・リチャード・オヘアは1876年3月にカンザス州に生まれた。カンザス州は1876年の女性参政権に関するカンザスキャンペーンで知られるように革新的な地域であり、ここには多くのユートピア社会主義共同体も存在していた。また、ここで発行されたフリースピーチを説く『リュウシーファー』(Liucifer)『ザ・ライトベアラー』(The Light-bearer)は女性解放、性教育、労働者の権利を謳った新聞であり、オヘアも関心を抱いた。また、1870年代から90年代にかけて、女性クラブ、女性参政権組織、女性キリスト教禁酒同盟(WCTU)などの女性による改革運動も活発になり、オヘアもWCTUの活動に参加している。禁酒運動に共鳴すると共に、彼女は当時の価値観、女性の道徳的優位性に基づく慈善を信奉し、それを根拠として売春婦の救済にも当たった。

しかし、オヘアはしだいに政治経済問題に関心を抱くようになる。1901年、オヘアは社会主義を学ぶための夜学である「社会主義経済国際スクール」(International School of Socialist Economy)に参加した。このクラスでのペーパーは社会主義誌『アピール』(Appeal)に掲載されオヘアの初の記事となるが、彼女は「労働組合は労働者のため、グレンジは農民連盟のため、しかし社会主義はあらゆる人間を資する」とし、社会主義を全面的に賛美した。¹⁾社会主義と労働運動にコミットしたオヘアの執筆、講演活動が以降、展開されることとなった。労働者支持を掲げた彼女は労働組合運動の中心組織であるAFL(アメリカ労働組合連合)が、増大しつつある未熟練労働者を軽視していると批判しつつ、また会長のサミュエル・ゴンパーズ(Samuel Gompers)が社会主義に無関心であると指摘しつつ、社会主義に耳を傾けるように求めた。だが、IWW(世界産業労働組合)が1905年に設立されると、そのアナキスト的戦術をより身近に感じるようになった。いわゆる「改良主義社会主義者」として、彼女は労働時間短縮を含めた法整備を説き、男性有権者が社会変革の主体となるように訴えた。

オヘアは青少年の労働は明確に資本主義による搾取だと断言する。²⁾また、女性は賃金のために働くにもかかわらず、低賃金に甘んじている現状を指摘し、最低賃金を制度化するよう求めている。³⁾一方、

女性の本来の場は家庭であると信じていたオヘアは「男性が家庭を養えるだけの賃金を得れば生活は清潔で健全で安全かつ幸福なものとなる」とし、社会主義社会の実現により貧困が解決されれば女性はみずからの領域に戻ることができると考えた。⁴⁾飲酒もまた、貧困、青少年労働、売春と同列に論じられる。社会主義が唯一の飲酒問題解決の手段であるとされる。なぜならば飲酒は資本主義社会に内在する問題だからであるとオヘアは議論を単純化した。1915年、失業率の高騰の際に、オヘアは貧困層が都市から都市へ職を求めて移住し、食糧配給所の前に列をなしている現状を憂え、とくに農民の貧窮に言及、農民支援プログラムの作成を説き、社会党の中で傑出した存在となった。

一方、オヘアはストライキ委員会の招待を受けて英国のダブリンに渡った。そこで英国の労働者が効果的に労働運動を行っていることに感銘を受けた。⁵⁾また、国際社会主義委員会の唯一の女性代表となった彼女は、ヨーロッパにおいてさえ、女性代表は男性の目には奇異に映ることに驚きもした。

1910年、オヘアは州の議員選挙に立候補した。それは家庭に留まりたい思いを抱く一方で、社会主義社会実現のために一步を踏み出そうとするオヘアの決意表明であった。現実にはカンザス州は、1912年まで女性参政権を認めていなかった。したがって、オヘアの出馬は女性の存在をアピールするに留まり、結果は敗北に終わった。1909年、セントルイスに移住したオヘアは、そこで社会主義者以外とは交流を持つべきではないという党の方針に反して、地域の女性参政権運動に参加し、全米女性参政権協会を支持した。アメリカ社会党は1910年までに国会に一議席を得た。党の州議会議員の数は百を越えた。オヘアも1916年にミズーリー州から合衆国上院への初の女性として出馬した。1913年までに社会主義新聞、雑誌の数も百を越え、オヘアも『ナショナル・リップソー』(National Rip-saw)の副編集長となった。一方で、アメリカ社会党は国際的な社会主義運動の一翼も担うこととなる。アメリカ社会党はマルクス主義の立場を取らず、修正主義を取った。革命や直接行動によらず、直接選挙により政治目標を達成させようとする見解である。オヘアも明確に修正主義のスタンスを取った。なおかつ、彼女が「赤いオヘア」と呼ばれ、革命家とされた背景には社会主義、フェミニズム、そして反戦運動が反アメリカ的であるとするアメリカ社会の側の問題があった。オヘアが実は家庭重視を唱えているのにも関わらず、社会は彼女の主義主張は反家庭的と断定した。オヘアは自らをフェミニストとは自認していない。彼女は大会の代表として、全国代表委員会のメンバーとして、また国際社会主義事務局の党代表、そして女性全国委員会のメンバーとしてアメリカ社会党に貢献した。その活躍はめざましいものがあったが、後に彼女は反戦運動に没頭し、その結果、投獄された。

さて、アメリカ社会党はアフリカ系アメリカ人の問題については理念と現実が一致しない政策を取った。すべてのアメリカ人の権利の擁護という立場の中にはアフリカ系アメリカ人の権利も当然のことながら含まれており、党は参加資格に彼らを排除していなかった。しかし、党は積極的に彼らの参加を促す政策を何ら取らなかった。オヘアのアフリカ系アメリカ人に対する姿勢は極めて差別的である。彼女はアフリカ系アメリカ人を劣った人種と断定した。1912年の「ニッガーの平等」と題するエッセイの中で彼女は次のように述べている。

私たち社会主義者はニッガーを好まないことは彼らが私たちを好まないのと同様である。私たちは彼らの鼻の形や皮膚の色を好まない・・・黒人も白人も賃金の奴隷であり、借地のために働き、文盲であり、貧困の中にある。社会主義は「平等」を両人種の生活手段と機会均等へのアクセス権を与える意味での平等へと変更するものである。・・・人種問題解決とは何かとあなたは尋ねるだろう。答えは一つしかない。隔離である。・・・黒人へは彼らに適したこの国の土地の一部を与えればよい。資本主義の搾取から解放された土地。その土地を与え、機械を所有させ、自らの救済のために働かせればよい。もし黒人がその機械を利用し、自分たちの文明を発展させればそれもよい。もし黒人が狩猟や魚釣りに明け暮れ、怠惰な生活を望むなら、だれも咎めはしない。彼らの問題であるからだ。⁶⁾

アフリカ系アメリカ人の問題は南部の問題であり、なканずく南部の黒人の問題とし、解決策を人種隔

離に求める。こうした姿勢は当時の多くのアメリカ人が共有していたものであるが、社会党の理念である人種平等主義とは対立するものであった。ネイティブアメリカンとアフリカ系アメリカ人を進化していない人間と見る偏狭なナショナリズムをオヘアは賛美し、それゆえに平等思想とナショナリズムの相反する側面に無自覚であった。

2 フェミニズム

ケイト・リチャード・オヘアは自らはフェミニストではないと述べているが、彼女の女性問題に関する思想、言い換えればフェミニズム思想は彼女の社会主義思想と密接に関わっている。女性問題について、彼女は多くを執筆し、また講演の演題ともしている。社会主義の古典であるマルクス、エンゲルス、ベーベルの理論を運用し、彼女は社会主義社会の実現によってのみ女性は解放されると断じた。女性は貧困からのがれたいがゆえに結婚に走るが、愛のない結婚生活は女性の救いとならないばかりではなく健康、教育、将来の機会までも犠牲にするものであると彼女は考える。そして、そうした結婚は産業奴隷を生み、次世代にまでそれを伝え、売春にもつながると彼女は論じる。離婚については、女性の精神的安定に必要なならば離婚法制定もやむなしと判断している。

オヘアの家庭観は女性参政権についての論考「女性は投票すべきか」に端的に表明されている。

家庭は女性的な活動の論理的な場である。生物学と自然な労働の性別役割分業が女性をそこに位置づけたのである。・・・私たちは性質上、男性が女性の本来の場を奪い、家庭を守り、家庭を介護する女性の仕事を男性が代行することを期待しない。男性の関心は男性的なものであり、自然を征服し、生産のために機械を作り、配分することである。・・・女性は女性の問題と取り組まなければならない。しかし、こうした問題は個々の女性の個人の問題であることを止め、母性全体の問題となっている。・・・集団的に行動してのみ、女性は広い家の問題を解決することができる。この集団的行動は政治である。啓蒙された民主主義は個々人の別々の関心を代表する。これが平等参政権の意義である。⁷⁾

オヘアはヴィクトリア朝以来主張されてきた男女の異質性を支持し、男女はそれぞれ自らの領域の中で問題を解決すべきとした。しかも、開拓者としての男性というジェンダーイメージを信奉している。ここからは被支配者としての女性の無意識の肯定さえ読みとれる。社会主義そのものが何ら女性の平等を志向するものではなかったことを考え合わせれば、オヘアは女性について考察はしているが、男性社会主義者の議論を越えるジェンダーの視点を提示できなかつたことになる。オヘアの主張は古典的に映る。女性の解放を「女性の問題」として捉えずに、社会主義の問題、とりわけ財産の社会化の問題と考えたところにオヘアの限界があった。女性であるがゆえに、彼女は女性の問題に多く言及はしたが、それらを内面化せず、しばしば男性の視点で論じ、男性社会の中で抑圧の実体は無自覚になった。この論が出された1914年、グリニッジ・ヴィレッジのフェミニスト、クリスタル・イーストマンは男女の異質性、女性の男性への依存を否定し、男女が共に平等に参画する社会を構想した。社会主義者のシャーロット・パーキンズ・ギルマンが唱えた家事の社会化という女性解放のためのプランを社会主義者オヘアは持ち得なかつた。

一方で、オヘアは女性参政権を支持した。投票権は社会の中で権力を持たない人たちにとって、必要な武器であると考えたからである。また、女性、とりわけ女性労働者にとって参政権は自己防衛の手段であるとも考えたからである。社会改革運動家の議論、投票権はアメリカの家庭と家族を守るとする議論にもオヘアは賛同した。反フェミニストが主張した議論、社会主義、フェミニズムは等しく反家庭的であるとの議論は適切ではない。家庭を守るための女性参政権はアメリカ社会党の主張でもあったし、また、他の女性改革者の多くも賛同していた議論であったからである。1914年のニューヨークにおける

女性参政権キャンペーンにオヘアは参加した。党内の女性問題にはコミットしないと主張するグループとはたもとを分かち、党員として、また女性として女性の権利を訴える姿勢は全米女性参政権協会の友人たちとのネットワークに支えられたゆえに貫けたものであった。

オヘアは参政権は女性の権利であるが労働者階級の権利でもあると主張する。自らの属する性と階級の権利であるとするのである。さらに、投票権を行使することにより私有財産の共有化、生活手段の集団的コントロールが可能となり、社会主義社会が実現すると彼女は説いた。そのプロセスの中で、女性も平等という特権を保有すべきであり、自らを保護する権利があると彼女は論ずる。現在では、法は財産のみを保護し、人間の生活は守っていないとするオヘアは労働者階級の女性の生活に注目する。また、戦時の男性の軍役のみを評価し、女性の戦時の家庭での役割を軽視するのは正当ではないと主張した。資本主義下で守られているものは財産のみであり、ゆりかごから墓場まで労働者階級の女性は男性という人類に奉仕してきたと彼女は断じた。女性参政権を主張する根拠は女性であるからではなく、労働者であるからであると彼女は力説した。⁸⁾女性が資本家のために働くことが問題であると彼女は考えたのである。⁹⁾

資本主義の発展とともに女性の従属は産業の根幹となったとオヘアは考える。モーガンの『古代社会』とメイソンの『原始時代における女性の分担』を引用しつつ、古代社会において「女性は平和の創造者、判事、司祭でありグループの母であった」とする彼女は文明と戦争が分かち難く結びつくなかで女性の地位が低下したのだと考えた。¹⁰⁾しかし、母系制は必ずしも母権制を意味せず、モーガン、メイソンらの研究は現在では見直されていることもまた事実である。オヘアはアダムとイブの神話ではなく、資本主義という男性の仕事が女性を奴隷化し、男性による財産相続システムが女性に性的にも夫への服従を強いているとし、女性は歴史を書いていないと嘆く。オヘアは願う。

男は女が何を感じ、何を言おうとしているかを知らない。・・・私たちは男の世界に生き、女性は権利によらず、許可により生きる。・・・その女性の執筆による書籍を購入出来たとき、将来の娘たちは真実を書くことができよう。¹¹⁾

このことばは理論ではなくオヘアの実感ではなかったか。

オヘアはマーガレット・サンガーと産児制限についても多くを言及している。貧しい家庭、子供を育てられない家庭に対して産児制限を合法化し、若いカップルに対しては精神的に成熟するまで子供を持たない選択肢を与えるべきとオヘアは考えた。中絶の必要性は認めつつ、子殺しに対しては大いに危惧する彼女でもあった。1916年、オヘアはサンガーの「人生において最も重要なことは人間を産むことであり、女性創造主は産む時を決定する権利と力がある」との論に賛成した。また、フリースピーチ支持の観点からもサンガーのセントルイスでのスピーチに対する大司教グレインらの介入を批判し、次のように述べた。

セントルイスの何千もの女性たちの権利、母性は犯しがたく神聖なものであると正直に感じている彼女たちの権利について述べる。人間を産むことは神聖なる責任であり、その調節は産む女性の手に委ねられるべきであり、その責任は唯一、肉体的欲求の満足の為の気まぐれな男性の手に委ねられるべきではない。・・・マーガレット・サンガーは労働者階級のために勇敢な闘いを行っている。彼女に手紙を出し、そのように彼女に伝えよう。¹²⁾

サンガーに全面的に賛同しつつも、オヘアはサンガーのパンフレット配布には反対した。オヘアは女性の問題は労働者の問題とし、社会主義により解決されるとした。しかし、一方で、女性参政権、産児制限を支持もした。また、家庭を女性の領域と考えていたが、その中で母性を重視し、将来の社会において女性の真実の声が記されることを願った。オヘアの願いは旧世代の改革運動家の声に近い。世紀転換期のさまざまな女性による改革運動にも世代交代の波が押し寄せていた。

3 反戦と投獄

家庭第一主義がナショナリズムと分かちがたく結びついていた時、戦争協力は正しいアメリカ主義であり、反戦を唱えることは反逆であった。ケイト・リチャード・オヘアは社会主義者であるとともに反戦を主張する国家に対する反逆者となった。1907年、1910年と社会主義インターナショナルは反戦を決議し、アメリカ社会党はヨーロッパにおける戦争について論議の末に1914年に支配者階級による戦争であると糾弾し、資本主義の崩壊に救済を求めた。セントルイスにおいても社会党はこの年の8月16日に反戦集会を持った。オヘアも党の方針に沿って新聞に反戦記事を掲載し、1916年に党から上院選に立候補し、ナショナリズム批判を展開した。戦争による雇用の悪化は政府の罪であり、これに対して女性こそが反戦の列に加わるようオヘアは主張する。そして、世界が母国であり、自らの階級のために働くことを主張し、平和と社会主義こそ信条とし、それらにのみ忠誠を誓うのだとオヘアは論じた。この年、ウィルソン大統領は2期目を務めることとなる。社会主義全国代表委員会はヨーロッパの社会主義同胞に対し、反戦集会を持つように呼びかけた。1917年、委員会の緊急会議が召集され、その席でオヘアはアメリカの女性が戦争で愛するものを失う点を強調した。1917年に発表された「社会主義と世界戦争」の中で、社会主義者のみが平和を求めているとし、オヘアはいくつかの論点を提示している。その中には、戦争により軍事行動が正当化され、軍の法規のみが適応されること、それにより合法的に市民が軍人としてかり出されること、戦前において未婚の母は不道徳視されていたが、戦時には女性は子供を産むためのみ存在しているとされることが掲げられた。

ヨーロッパの政府、そしてヨーロッパの教会が女性に結婚していようがまいが「男が死ぬ前に産む」ことを要求することは狂った欲望による罪ではなく暴力的な利己的な血の凍るような犯罪であり、この犯罪によりヨーロッパの女性は家畜場の動物のように貶められた。・・・非嫡出子である。父親を知らない子供たちである。・・・彼らは結婚の実りでもなく、愛の結晶でもない。・・・淫らな欲求により妊娠されられ、憎しみの中で生まれ、貧困、疫病、飢餓の中で生まれた。彼らが戦争の申し子である。¹³⁾

女性として、彼女は生きること、呼吸することの大切さを訴える。女性には長い記憶があり、男性にはそれはないのだと訴えた。

1918年、オヘアは反逆罪により懲役5年の刑を宣告された。1917年、その記事「待て」の中で、オヘアは「出版の自由、思想信条の自由、表現の自由を大いに評価する」と述べ、この国の民主主義は死んだが革命的出版物の発禁に抵抗しよう同士に呼びかけている。¹⁴⁾

オヘアは法廷において「私は人々に私たち皆が戦争を憎んでいることを知らせたい。戦争をなくすためには戦争から得る利益をなくすことをある」と述べた。彼女は陪審員により犯罪者ではないが、危険人物であると評された。オヘアは戦争で利益を得た人物が彼女を抹殺したいのだと宣言した上で、刑に服し、その中で自らの仕事をするを誓った。17世紀の魔女狩り同様な裁判において、いくつかの罪状が彼女に着せられた。オヘアはドイツ・アメリカ連盟のメンバーであると情報は伝えた。判事のウェイド(Wade)はオヘアがアメリカの国策を批判しているとし、またアメリカの組織を称えることを怠っているとした。また、彼女の「世界平和」と題された演劇はこうした不満を表現し、無政府主義さえ唱えたものと解釈し、このことにより5年の刑を課したのである。1918年、この刑が確定する前にオヘアは「肉体的にも、精神的にも私はかつてより強くなった。もし刑務所に入ることになっても自由の一瞬、一瞬を有効に使う。」と述べ、「社会主義をとおして、友人や隣人に私を助けるように伝えて欲しい」とも語っている。¹⁵⁾また1919年のケイト・リチャード・オヘアの別れの挨拶の中で、スパイ防止法がいかに自由と人権を侵害するものであるかを鋭くついた。

我が国の歴史に、その選挙で選ばれた当事者が人類の歴史を黒く塗りつぶすような卑劣な恥ずべき話を書き加えたのである。それが、いわゆる「スパイ防止法」である。¹⁶⁾

その「スパイ防止法」を適用する行政に対して意見を持つことが罪になり、また何かを企てたこと以前に企てる意図を持っていたことが罪になる点をオヘアは糾弾した。その例として、捉えられた運動家、ローズ・パストア・ストローク (Rose Pastor Stroke)、ユージーン・デブス (Eugene Debs) を掲げ、マックス・イーストマン (Max Eastman) が民主主義について演説を行ったときに暗殺を企てた者がいたこともアメリカ主義の台頭が原因であると彼女は論じた。ウィルソン大統領が偽善者であると発言した少女が20年の刑に服している悲劇にも言及し、オヘア自身の刑も彼女ないしは彼女の子供たちだけの運命のみならず、国家の運命であるとした。戦争は帝国主義政策ゆえの失策であり、アメリカの介入は経済侵略であると彼女は考えたのである。その戦争こそ労働者の意志に反するものであるとする彼女は労働者階級のために刑に服することを決意したのであった。

投獄された政治犯の中には社会主義者のユージーン・デブス、アナキストのアレクサンダー・バークマン (Alexander Berkman) とエンマ・ゴールドマン、IWWのビル・ヘイウッド (Bill Haywood) とラルフ・チャップリン (Ralph Chaplin)、共産主義者のエリザベス・ガーレイ・フリン (Elizabeth Gurley Flynn)、産児制限運動家のマーガレット・サンガーの名があった。オヘアは獄中から多くの手紙を友人宛に送っている。1919年6月8日付けの手紙で初めて「女性の問題」に目覚めたと記していることは注目されよう。

ご存じのとおり、私はとりわけ過激なフェミニストではありません。むしろ、私は「女性の問題」は大きな社会問題の一部にすぎないと感じてきました。しかし、二ヶ月で私の見方は変わったのです。今や、かつてなかったほどに女性は最も重い荷を担い、最も険しい道を歩いている、それはどんな生活をしている女性も同じであると考えようになりました。¹⁷⁾

オヘアは中産階級がその運動の中心を担っている女性参政権の実現のみでは問題の解決にはならないと考えたものの、ニューヨークでの参政権獲得に大きく心を動かされた。

1919年8月、オヘアは刑務所内からしか刑務所改革はできないとし、実体験がいかに重要かを力説している。また、1921年2月には刑務所の状況を一般の人々に知らせるための雑誌を発行すべきとも述べている。彼女は女性の刑務所について監視員が女性の服役者をまるで身を持ち崩した女であるかのように取り扱っていると批判し、彼女自身は獄中で多くの女性に出会い、フロイトの心理学や犯罪学はあまり有効ではないと実感したと書いた。そして、犯罪の原因は貧困にあり、社会変革こそ重要と認識するに至った。さらに刑務所内での女性の労役は更正ではなく搾取であるとの確信を得た。¹⁸⁾獄中でエンマ・ゴールドマンに出会ったオヘアはアナキズムは危険視しながらもエンマを絶賛した。

エンマ・ゴールドマンはこの国で30年間、アナキズムを唱えてきた。アナキは安定した国家に対し、無法と混乱、犯罪と危険をもたらすと考えられている。しかし、ここ30年間、アナキストが犯した犯罪の数よりここ3ヶ月間にアメリカ・レジオンのメンバーが犯した罪のほうが多い。エンマとその仲間は安定した政府を危険に陥れてもいない。法を犯してもいない。エンマのアナキスト哲学ではなく彼女の情熱的な母性的精神が人々を魅了するのだ。¹⁹⁾

オヘアが初めて欠席した1919年8月の社会党の全国大会で党は分裂した。左派は「共産主義労働党」と「共産党」に分裂し、社会党員は十万四千八百二十二名から二万六千七百六十六名に激減した。1920年4月26日付の手記の中でオヘアは社会党は後悔することもなく、謝罪することもないとし、離党したメンバーを呼び戻し、党を再生させよと書いた。

4 おわりに

1920年5月29日、ケイト・リチャード・オヘアは出獄した。1920年代以降のオヘアの思想と行動は彼女が執筆したいくつかの記事に現れている。1922年以降、オヘアは農民、労働者、社会主義、革新主義をつなぐいくつかの会合を持ち、社会主義者と労働者の連帯に尽力した。1923年、コモンウェルスカレッジ (Commonwealth College) で講演を行い、教育が支配者階級による強制であると喝破した。この年、クリーブランドでの会議に出席し、社会主義者や労働運動家とともにロバート・ラファレット (Robert La Follette) を大統領候補として支援した。そして地方の労働者の連帯を主張、カリフォルニアでは貧困撲滅協会 (End Poverty in California) に参加、この協会を最も革命的組織と考えるも、1935年に協会は民主党に吸収される形で解散した。オヘアは一貫して改革主義者であり、共有財産制はゆるやかに実現されるべきと主張し続けた。彼女は暴力さえも容認するIWWとは距離を置き、共産党に加わることもなかった。

1920年の女性参政権獲得は政治的民主主義の成立であったが、一方で1920年代の保守主義はフェミニズムとラディカリズムを等しく家父長制と社会秩序への反動であるとした。こうした社会背景の中で、セクシュアリティ、家族は政治的意味を持つ。女性の市民権は男性に従属する。ラディカリズムは家族制度と国家への脅威とされた。結婚と家庭は既婚男性の安定の基盤となり、それにより彼らは真のアメリカ人となるのである。²⁰⁾男性は軍役に服することでさらに家父長的存在感を示すことに成功した。戦争は男性の英雄を生み、女性を排斥した。ケイト・リチャード・オヘアの反戦運動と投獄は彼女が夫に尽くす愛国的母のイメージを破り、愛国的ではない政治的、道徳的にひ弱な息子を育てていることを社会に公表したとされた。1910年代にグリニッジ・ヴィレッジフェミニスト、アナーキストフェミニストは政治経済に言及すると同様に性的抑圧についても論じたが、このことは1920年以降にはフェミニズムが社会主義、性の解放と同義であるとされ、保守派の標的となる材料となった。反革命誌『レッド・フレイム』 (Red Flame) はオヘアが関わり、社会主義者が集う無党派同盟を批判し、社会主義は結婚においても家庭生活でもストライキを行っているとして述べているが、オヘアは実のところ保守的家族第一主義者であった。また、雑誌『女性愛国者』 (Woman Patriot) は女性愛国者は家庭を重視し、家庭こそ愛国サービスの場と考えると、これに対し反戦を反家庭、反国家主義と断じた。また、女性参政権も家父長制に反するとして反対し、女性の市民権は男性のそれとは異なるとした。女性参政権獲得後は女性の政治は男性の政治とは異質となると保守派は論じた。革新主義時代の女性による改革運動は1920年代になると赤狩りの標的となり、反戦、社会主義と同様にジェンダー、セクシュアリティが政治課題となったのである。オヘアはこの時代における反逆者であった。

註

- 1) Sally M. Miller, *From Prairie to Prison The Life of Socialist Activist Kate Richards O'Hare* University of Missouri Press 1993 p 22
- 2) Kate Richards O'Hare, "As a Bud Unfolds" *National Rip-Saw* November, 1912 p 2, 3 in *Kate Richards O'Hare Selected Writings and Speeches* eds. Philip S. Forner and Sally M. Miller pp 52
- 3) Kate Richards O'Hare, "The Wages of Women" *National Rip-Saw* July, 1913 pp 2, 6-9 in Forner and Miller p 64-65
- 4) Kate Richards O'Hare, "Drink, Its Cause and Cure" *National Rip-Saw* September, 1913 p 3, 6 in Forner and Miller pp 85
- 5) Kate Richards O'Hare, "The Story of an Irish Agitator" *National Rip-Saw* April, 1914 p 6, 7, 9 in Forner and Miller p 90
- 6) Kate Richards O'Hare, "Nigger' Equality" *National Rip-Saw* 1912 pamphlet in Forner and Miller p 48
- 7) Kate Richards O'Hare, "Shall Women Vote?" *National Rip-Saw* July 1914 p 5-6, August 1914, p 5-7, October, 1914 p 10-13 in Forner and Miller p 98
- 8) *Ibid.* in Forner and Miller p 105
- 9) Kate Richards O'Hare, "Priscilla at Her Loom" *Socialist Women* II July, 1908 p 8 in Forner and Miller p 108
- 10) Kate Richards O'Hare, "The Tale of a Rib" *National Rip-Saw* October, 1916 p 5,6,8 December, 1916 p 5,6 February, 1917 p 5 in Forner and Miller p 114-118
- 11) *Ibid.* in Forner and Miller p 118
- 12) Kate Richards O'Hare, "Margaret Sanger" *National Rip-Saw* July, 1916 p 5 in Forner and Miller p 110
- 13) Kate Richards O'Hare, "Socialism and the World War" pamphlet by Frank P. O'Hare 1919 in Forner and Miller pp 132-133
- 14) Kate Richards O'Hare, "Waiting!" *Social Revolution* December, 1917 p 4 in Forner and Miller p 183
- 15) Kate Richards O'Hare "The End of Act One" *Social Revolution*, March, 1918 p 2.13 in Forner and Miller p 191
- 16) Kate Richards O'Hare "Farewell Address of Kate Richards O'Hare" *Oakland World*, April, 25 1919 in Forner and Miller p 195
- 17) Kate Richards O'Hare letter dated June 8, 1919 in Forner and Miller p 218
- 18) Kate Richards O'Hare "Recommendations" booklet in St. Louis by Frank P. O'Hare 1920 pp 62-63 in Forner and Miller p 323
- 19) Kate Richards O'Hare letter dated January 20, 1920 in Forner and Miller p 264
- 20) Hanson, Ole . *Americanism versus Bolshevism* New York : Doubleday 1920 pp.viii, 91, 247